

思ひ草

第36号

令和3(2021)年11月26日 発行

道草をしませんか

初等教育学科教授 しばさき 柴崎 かずお 和夫



真鍋淑郎先生は、気象・気候学での先駆的な大気モデル構築とそれによる温暖化研究が評価され、今年のノーベル物理学賞を受賞しました。気象学は応用科学と目されていたので、この分野での物理学賞受賞は、驚きでした。もちろん、気候変動が人類にとっての脅威となった現実を反映していることは事実でしょう。さて受賞決定後には、先生に関わる多くの情報がメディアに流れました。なぜ日本で研究を継続しなかったか、に特に焦点が当てられていた気がします。一方で、真鍋先生ご自身の研究に関する発言の中では、『好奇心』というのが一つのキーワードだと私は思いました。真鍋先生は名大大学院環境学研究科の広報誌「環」(2009年刊)のなかで、今回の受賞理由となった研究の経緯を語っています。もともとの目的の研究の中で「道草をしたくなって」、二酸化炭素による温暖化の影響を計算したと。研究のきっかけが単なる好奇心だった訳です。このことに触れた毎日新聞(10月8日朝刊)の「余録」によ

ると、かの寺田寅彦も「道草」の効用を説いているそうぞす(正確な出典は見つけられませんでした)。余録では、立命館大客員教授の水月昭道氏が著した「子どもの道草」(2006年、東信堂)の内容にも触れています。

「道草」は子どもが輝く時間(水月)だそうです。私達の子どもの頃、昭和の時代には学校帰りの道草はあたりまえでした。通学路には遊ぶ(好奇心)対象が一杯あったのです。現在は効率化が叫ばれます。目的に一直線で、ICTも一つ間違うと、効率化の為に使われかねません。今の世の中では、子どもには危険が一杯で、「道草」をしておいでは必ずしも勧められません。でも、「道草」は楽しいのです。楽しいことは子どもの心を、そして大人の心も浮き立たせます。好奇心を持ち続ける事は心に張りを生み、生きる力にもなると私は思います。皆さん、いつまでも「道草」を忘れずにいましょう。早速「道草」してみませんか。

幼児期の遊びと「おもちゃ」

子ども支援学科教授 いしかわ 石川 きよあき 清明



子どもは、おもちゃで遊ぶことが大好きです。おもちゃを使わない遊びもありますが、ここでは、幼児期を中心に「遊びとおもちゃ」について考えてみたいと思います。

おもちゃとの出会いは、乳児期に「ガラガラ・メリーゴランド・歯がため・ベビージム・ぬいぐるみ・ボール」などから始まります。なお「おしゃぶり」は授乳哺乳用品に分類され「おもちゃ」には入らないようです。この時期のおもちゃは、樹脂、布、木製が多く、見て楽しんだり触れたり転がしたりする感覚遊びをします。安全面、衛生面への配慮が特に重視され、壊れることはほとんど無く、1つのおもちゃの使用期間が短いことも特徴です。

幼児期になると遊びも広がり、おもちゃの種類も飛躍的にふえて、本物を模した物や見立てて遊ぶ物、集団で遊んだりおもちゃを組み合わせるなど複雑化します。作られている素材も木(枝・実・花・葉)、紙、石、水、土、砂、布などで、光、空気、風など自然と関わりながら遊びます。

また、市販品のおもちゃで遊ぶことも多くなります。年齢に関係なく皆が同じ物を持ち操作に習熟が必要なこと、素材が樹脂で、音、光、動きにIC集積回路、LED、モーターなどが使われ、壊れると家庭では修理できない事などが特徴と言えます。

幼稚園や保育所等では、「身のまわりの素材」を使っておもちゃを作り、友達とそれで遊ぶことを楽しみます。主な素材が木や紙なので、子どもが日頃から使い慣れているハサミや糊、ペンを道具にし、加工しやすいこと構造が簡単であることなどが特徴ですが、その一方で壊れやすいことも事実です。しかし、自分で修理ができる事も重要で壊れた理由を調べたり、壊れにくい物を作ろうと工夫したり、修理の過程で新しい要素を加えたり、おもちゃの扱い方を通して物を大切にすることを学ぶ機会にもなっています。保育現場は、これまで遊び継がれてきた文化である遊びとおもちゃを次世代に伝えていく大切な役割を担っています。

教育実習

教員志望者の減少と教育実習

初等教育学科教授 わたなべ まさとし
渡邊 雅俊



周知のとおり、教員志望者の減少に歯止めがかかりません。採用数は維持されている状況が続くので、教員採用試験の倍率が下がっていく一方です。このことが単純に教員の質を低下させているとは思いませんが、教職イメージの悪化に影響しているのは明らかです。

この点について、教育実習が鍵になっているのではないかと考えています。実習中あるいは、終了後に学生たちの多くは、「教員になりたい」という前向きな気持ちをさらに高めます。その一方、「教員に向いていないのではないか」という後ろ向きな気持ちを持ってしまう学生もいます。このような、教育実践の体験によって形成される心理に「教師効力感」があります。「教師効力感」は、簡単に言うと、教職に対する自信のことです。「教師効力感」に関する研究によれば、この心理が高い学生は、教員採用試験に向けた勉強の意欲が高まります。さらには、晴れて教員になった際、仕事に熱心に取り組み、日々充実を感じ、研鑽を怠らないキャリアになる傾向があります。

このように「教師効力感」の程度は、教員を目指す大学生の将来にとって重要な心理であるわけですが、それに最も影響力のあるのは、間違いなく教育実習です。私は教員養成課程の教員となって20年近く経ちますが、教職を断念した学生の多くは、教育実習が主な要因でした。彼らは、教育実習において、児童に教えることや関わることの難しさに不安を感じ、「教師効力感」を低下させて、憧れていた教員になることを諦めてしまうのです。

最近、気になるのは、大学教員から見て、教職適性が十分にあると見られる学生が教職を進路に選ばない傾向です。これらの学生のなかには、極めて能力が高く、なかには成績優秀で表彰される者もいるほどです。しかし、彼らは教育実習の体験から悪い自己イメージを形成してしまい、「教師効力感」が低くなるのです。今後、このような学生を支援することが、教員不足が顕著な昨今において、教員養成課程の新たな責務だと考えています。

教育実習を通して明確になった自分の教師像

初等教育学科 3年 むらやま みれい
村山 美怜

私は親身になって接してくださる先生方のおかげで、教育実習がとても充実したものになりました。私が教育実習を通して特に学んだ二点について述べます。

一つ目は、子ども一人一人と関わり理解することの大切さです。私は一年生のクラスで実習をしました。私は、上手く輪に入れない子、関わりが薄い子ほどたくさん接するように心掛けました。人見知りで本当はみんなと遊びたいけれど、なかなか「入れて。」が言えない子には、授業中に席をまわっている時に一言声を掛けたり、休み時間に好きな食べ物の話など答えやすい話題でコミュニケーションを図りました。少しずつその児童と仲良くなると、自然とみんなの輪に入って遊べるようになり、最終的には自分から「入れて。」が言えるようになりました。私は、児童と積極的に関わることで長所をたくさん見つけ、褒めて自信をつけさせることが大切だと感じました。

二つ目は、言葉には子どものやる気を引き出す力があるということです。同じことを伝えても、言葉の選び方一つで子どもの心への響き方が変わってくることを、身をもって感じました。例えば、「一生懸命掃除した真っ黒な雑巾は、白の雑巾より美しい雑巾なんだよ。」と伝えると、「ちゃんと掃除しようね。」と伝えた時よりも子どもたちの掃除の意欲が高まりました。私は教師になったら、やる気を引き出す言葉掛けを工夫していきたいです。

私は教育実習で、積極的に先生方からアドバイスをいただきに行くよう心掛けました。子どもと関わる時は常に自分が教師になったらどう対応するかを考えて接しました。教育実習は、教師になるためのものではなく、教師になってから自分はこうしたいというイメージをより確かなものにするための実習だと私は思います。

教育実習を通して、自分の目指したい教師像がより明確になりました。一人一人を理解し、子どもに自信を持たせ、子どもの可能性を広げることの出来る教師になりたいです。

教育インターンシップ

子どもにとってより良い保育者に近づくために

子ども支援学科 2年 うちうみ はるほ
内海 遥帆

今年の6月から7月にかけて教育インターンシップに取り組んだ。今まで幼児と関わる経験はほとんどなかったので、最初は関わり方がわからず不安なことも多かったが、一緒に過ごす中で幼児の様子、幼児同士の関わり、保育者の仕事等について実際に見て自分の力として得ることができ、自信にもなり、これからの学びへの意欲にも繋がったと感じる。多くのことを経験させていただいたが、その中でも私が特に印象に残ったことについて述べる。

1つ目は、幼児の行動の意欲はその時の気持ちと強く結びついているということだ。このことは、何度も実感した。喧嘩の際は止めに入ろうとしても上手くいかず、双方の子どもの気持ちを言葉にして受け止めることによって、落ち着いてもらうことができていた。私が実際に子どもと関わってやりがいを感じたのは、初めはご飯を食べることを拒否していた子が、一緒に話をしながら見守っていると少しずつ食べる意欲を見せてくれたことだ。保育者側が意図して何かをやってもらおうとするのではなく、幼児に寄り添い、気持ちを受け止めることの大切さを幼児と関わる中で実感した。

2つ目は、保育者の役割として、一人一人の子どもを受け止めながらもクラス全体の流れを大切にしなければいけないということだ。私は一人一人の幼児を受け止め、丁寧に関わることを意識していた。しかし、そうするとクラス全体での活動に間に合わない幼児もあり、難しさを感じた。そこで担任の先生を見ると、クラス全体に指示しながらも、その行動が遅れがちな幼児を把握して、適度にサポートしていることが分かった。毎日幼児一人一人と向き合った上で全体も大切にしていることを理解した。

これら2つのことは教育インターンシップに行って実際に現場で体験したからこそ学べたことだと思う。1年の時に学んでいた理論的なことを教育インターンシップでは実践に結び付けることができたので、これからはさらに教育インターンシップでの経験をもう一度理論的な学びに結び付けることによって、より良い保育者となるための力にしていきたい。

教育インターンシップ連絡協議会

令和3年7月1日(木)15:00~16:00に令和3年度教育インターンシップ連絡協議会をオンラインで、開催いたしました。今年度、教育インターンシップに関わる学生は、子ども支援学科71名、初等教育学科95名、健康体育学科18名、計184名おります。

当日は、教育インターンシップの受入れ校・園の先生方が24名も出席してくださいました。

まず、成田信子学部長より教育インターンシップの意義と受入れ校・園の先生方への感謝の言葉が述べられました。その後、大学のスタッフ紹介がなされ、今年度の教育インターンシップの実施状況について、幼稚園・児童福祉施設については廣井雄一先生、小学校については小笠原優子先生、中・高等学校については植原吉朗先生、特別支援学校については高橋幸子先生より報告がありました。すでに教育インターンシップの実習が始まっている学校・園の先生方からは、どのような実習を行っているか、学生の実態などについてご意見、ご感想をいただきました。初めて教育インターンシップを受け入れてくださる学校・園もあることから、貴重な情報交換になりました。

最後に今後の教育インターンシップに関わる手続きや単位認定等についての説明を行い、次回は、令和4年1月25日に「第2回教育インターンシップ連絡協議会・報告会」を実施することを伝え、終了となりました。

第12回夏季教育講座 國學院大學教育実践フォーラム

コロナ禍における夏季教育講座その成果と課題 子ども支援学科助教 なかの けいすけ 中野 圭祐

コロナ禍においては、幼稚園・保育所から大学まで各現場で様々な困難を抱えながらも、学びを支える取り組みがなされています。その中では、本当に必要なことは何なのかを改めて見つめ直し、子どもの育ちや学びを支えるカリキュラムについて考える機会となった現場も多くあるのではないのでしょうか。第12回教育実践総合センター夏季教育講座は、「子どもの育ちや学びとカリキュラム・マネジメント」をテーマにオンラインでの開催となりました。

初のオンライン開催となり、準備段階から多くの皆様のご協力を得ながら試行錯誤を重ねての実施となりました。國學院大學では授業でZoomを使用していることから、夏季教育講座の実施においてもZoomを使用することとなりました。Zoomでの参加が困難な方のために、基調講演についてはYouTubeでの同時配信も行いました。オンラインでの開催ということで、全国から700名近くの参加者が、たまプラーザに向くことなく参加することができたのは大変大きな成果です。現地開催となると、どうしても遠方の方の参加は限られてしまいます。國學院大學の豊富な経験を持たれた先生が主催する本講座に参加されたい方々は全国にいらっしゃると思います。その方々の参加が容易になったという点では、オンラインでの開催の意味は大変高かったのではないかと思います。

一方で、大学以外の学校種ではオンラインでの授業が一般的ではないこともあり、現場の教員の中にはオンラインでの講座への参加に慣れておらず、敷居が高いという課題もあるかと思います。このコロナ禍では多くの業種でオンラインでのセミナーや講演、公演が実施されるようになりました。しかし教育の現場では一般的と言えるほど浸透しているわけではありません。このコロナ禍を経て、新たな生活様式の一つとして、世界中どこからでも質の高い学びが保障されるように教育や研修のあり方も変化していくことが期待されます。一方で、人間開発学部としてこれまで重要視してきた体験を通した学び(アクティヴ・ラーニング)も引き続き大切であることに変わりはありません。オンラインでの学びの大きな壁はここにあるかとも思います。学びの内容に応じて、オンラインの学びと対面での学びを使い分けていくことが求められ、今後の課題であるとも言えます。

最後に、オンラインでの開催にあたり、当日は多くの学生が技術的なサポートとして控え、運営を支えてくれました。オンラインでの講座の開催には、講座を実施する講師陣に加え、運営をサポートする裏方の存在が不可欠です。本講座を支えてくださった多くの方に感謝をお伝えしたいと思います。ありがとうございました。



開講式 学部長挨拶



全体会 基調講演



分科会



学生スタッフ